

# 國學院大學學術情報リポジトリ「K-RAIN」

『論語』と崎門：嘉点「克己復礼為仁」を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-01-08 キーワード: 『論語集註』, 克己復礼為仁, 私欲, 山崎闇齋, 神明ノ舎 作成者: 西岡, 和彦, Nishioka, Kazuhiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001305">https://doi.org/10.57529/0002001305</a>

## 『論語』と崎門

— 嘉点「克己復礼為仁」を通して —

西岡和彦

### はじめに

本稿は、『論語』顔淵第十二「克己復礼為仁」について、山崎闇齋（一六一八—一八二二）はじめ崎門学者や垂加神道家らが、どのように理解したのか、なかでも彼らが朱子学で重視する「復性復初の義」を受けて、身心をどのように見ていたのかを検討する<sup>①</sup>。

闇齋は儒教とともに神道をも研究したことから、彼の学問は「神儒兼学」といわれ、その基盤となる精神は「和魂漢才」<sup>②</sup>で

ある。そのことは、闇齋の直弟子であった渋川春海や谷秦山らが伝えており、闇齋の孫弟子にあたる若林強齋や彼の学問を継承した望楠軒の学派も、それを目指した<sup>③</sup>。

本稿では、闇齋と強齋のほかに、神儒兼学こそしなかったが、浅見綱齋も取りあげる。なぜならば、綱齋は闇齋の直弟子であり、かつ強齋の師であるだけでなく、闇齋の経学をもっとも正確に伝えた一人、と考えられるからである。そのため、谷秦山が綱齋に神道研究を強く勧めたのも、神儒兼学をもって闇齋の学問を総合的に継承して欲しい、と願ったからである<sup>④</sup>。

## 一、「克己復礼為仁」の諸解釈

まず闇齋がテキストとした朱子の『論語集註』所収顔淵第十二の「克己復礼為仁」を、現代の注釈書から検討することにしよう。

【和訓】己おのれに克かちて礼れいに復かえるを仁じんと為なす。

これは、石本道明・青木洋司『論語 朱熹の本文訳と別解』からの引用である。つぎに吹野安・石本道明『孔子全書』第六卷『論語6』は、少々読みが違う。

【和訓】己おのれに克かちて礼れいを復かむを仁じんと為なす。

と。現代語訳は、両書とも同じ「私欲にうち勝って礼の規範に立ち戻るようにするのが、仁である」とある。だが、和訓において、前者は「礼に復（かえ）る」とあり、後者は「礼を復（か）む」とある。この違いは、明らかに編纂目的の相違にあって、前者は『論語集註』にもとづいた和訓を付し（凡例の「方針」に、

「朱熹注釈に基づく本文の忠実な訳出に努めた」とある）、後者は共著者の研究成果にもとづくからである。なお、この違いを、後者は頭注で詳しく紹介している。

それによると、何晏（一九六―二四九）等『論語集解』（孔子十世の孫孔安国の説を引用）や皇侃（四八八―五四五）『論語義疏』（東晋（三二七―四二〇）の范寧（生没年未詳）の説を引用）そして刑昺（九三三―一〇一〇）『論語注疏』（劉炫という六〇〇年頃の人の説を引用）の説では、「復は反なり」とある。つまり、これら古代の『論語』注釈書は、朱子の『論語集註』と同じく、復を「かえる」と理解していた。

それに対し、先秦時代（紀元前二二一年以前）の書とされる『春秋左氏伝』の昭公十二年（紀元前五三〇年）の記事に、「仲尼曰はく、古に志（記録）有り、己に克ちて礼を復（か）むは仁なり、と」がある。これについて、かつて吉川幸次郎は、「もし『左伝』を信ずれば、孔子（\*前五五二―前四七九、\*を付した注記は西岡注、以下同じ）以前、（\*克己復礼という言葉は）すでに存在した古語、古くからあることわざ、となる」と説いた（『論語』中、七七頁。なお、吉川氏は「礼に復るは」と読む）。とすると、「克己復礼」の解釈や和訓も、『論語』よりも古い『左氏伝』の説に應じるのが適切、または妥当との説がおころう。

わが国でこの疑問をもとに『論語集註』を批判したのが、荻生徂徠の『論語徴』である。明治の漢学者瀧川亀太郎も『纂標論語集註』「顔淵第十二」の標注で、本来の儒教に、朱子学で主張する「復性復初之義」はないとし、太田錦城（一七六五—一八二五）の、「復」を「履む」とする説を紹介した。つまり、「復礼」とは、礼の規範に立ち返るのではなく、礼儀を履行すること、と。そして、それが現在の通説になっている<sup>6)</sup>。

なお、朱子や闇斎は『左氏伝』の記事を熟知していたが、「復」を「反」と解した。ならば闇斎は「克己復礼為仁」をどのように訓読し、かつ解釈したのだろうか。

## 二、嘉点の意図

闇斎の学問研究の方法は、「述べて作らず」（『論語』）である。闇斎は、三大全や朝鮮本に満足せず、より原典に近いテキストを求めて、テキストクリティークを徹底した。さらに、それに和訓を付して初学者でも読めるようにし、序文または跋文にその書の要点を記して刊行する。そうした木版本を、諱の嘉から「嘉点本」といい、それが崎門のテキストにもなった<sup>9)</sup>。

その嘉点『論語集註』<sup>10)</sup>を、浅見綱斎が詳細に講義した筆記録

が『論語師説』全十九卷である。これは崎門における『論語』研究の白眉であり、代表的な訓蒙書でもあった。それ以外にも、崎門内では同様の講義録が次々と作られ、若林強斎にも『論語師説』全十九卷と称す講義録がある。本稿では、以上の書をも参照した。

まず、嘉点『論語集註』から闇斎の和訓を見てみよう。

顔淵仁ニ問フ。子ノ曰。己ニ克テ礼ニ。復テ仁ヲ為ス。（原漢文、一六丁裏）

原漢文だが、嘉点に従って書き下し文にあらため、カッコ内は引用者が補った。この和訓の特徴は、「己」を「巳」とし、さらに「ワタクシ」とフリガナを付す。さらに、「為仁」を一般に「仁をなす」（または「仁となす」と読むところを、「為」に「ス」のフリガナを付して「仁をす」と読ませた。ただし、このあとに続く経文の読みは異なる。

一日モ巴ヲクシニハ克テ礼ニ復シトシ、天下仁ニ帰ル、仁ヲ為ストシ由ル、人ニ由ランヤ

とあり、「由己」の「己」は「オノレ」と読ませている。これ

について、山崎闇齋編『文会筆録』四之三（割注を【】で囲つた）に、「克己の己ハ私訓スなり【私欲の謂、由己の己ハ我ト訓スなり【人ニ対シテ言、字同シテ訓異ナリ、集註明クシ】（九六丁表）が参考になる。それによると、闇齋が「己」の和訓を「わたくし」と「おのれ」に使い分けたのは、『論語集註』に準じたから、という。

こうした『論語集註』に準じた和訓は、嘉点『論語集註』が刊行される十年前の、闇齋四十歳の頃に執筆した『大和小学』にすでに見られた。その当該箇所を引用すると、

○克己復礼為仁、此六字いろく、の和訓あり、  
 「わたくしにかちて、れいにかへるを、じんとす」、是一なり、  
 「わたくしにかちて、れいにかへるを、じんとなる」、是二なり、  
 「わたくしにかちて、れいにかへるは、じんをするなり」、  
 是三なり、  
 「わたくしにかちて、れいにかへるを、じんとするとす」、  
 是四なり、  
 「わたくしにかちて、れいにかへりて、じんをなす」、是  
 五なり、  
 いづれも先儒の説ある義にて、一意ある点なれども、本經  
 の正意にはあらざるなり、

「わたくしにかち、れいにかへりて、じんをす」、是愚点なり、  
 かくよみて集註のこゝろにかなふとおもふ、つらく論語  
 をよむで、克己の功夫ある人にあらざれば、ともにかたり  
 がたし、（四九頁、引用において、便宜上各和訓説をカッ  
 コに入れ、かつ改行した）

とある。闇齋は、「先儒」による五つの和訓をあげた後、以上  
 は「本經の正意にはあらざるなり」とした。それに対し、「愚点」  
 （嘉点）の和訓が「わたくしにかち、れいにかへりて、じんを  
 す」である。この「愚点」は、前述の嘉点『論語集註』と同じ  
 訓読であった。その理由は、「かくよみて集註のこゝろにかな  
 ふかとおもふ」と。すなわち、この和訓こそが、朱子の『論語  
 集註』の意図にかなう訓読であり、「本經の正意」と確信する  
 からである。なお、闇齋は、「克己」の「己」を、すべて「わ  
 たくし」と読む。なぜならば、朱子説を遵守すれば、それが自  
 明で、問題は「為仁」の「為」にあったからであろう。本稿も、  
 そこに注目する。

### 三、『論語集註』の意図とは何か

嘉点『論語集註』をテキストにした闇齋の講義録は未見であ

る。そこで、綱齋や強齋の『論語師説』を検討することで、闇齋の和訓が『論語集註』の意図にかなうものであったのかを検討したい。

まず、嘉点『論語集註』「顔淵第十二」の冒頭の経文とその註を引用する（なお、嘉点『論語集註』の引用に際しては、嘉点を忠実に書き下したが、不明なところは土田健次郎著『論語集註』3を参照した。また、「已」を、私欲を指す「わたくし」と、人一般を指す「おのれ」とを区別するため、そして「為仁」を「仁をす」と訓読するために、ふりがなをカッコにして付した。また、送り仮名も適宜付した。なお、原書は全て句点であるが、読点に改めた）。

顔淵第十二（凡<sup>レ</sup>二十四章）

顔淵<sup>レ</sup>仁<sup>ヲ</sup>問<sup>フ</sup>、子<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>、已<sup>ニ</sup>克<sup>チ</sup>礼<sup>ニ</sup>、<sup>（一）</sup>復<sup>テ</sup>仁<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>、一日<sup>モ</sup>已<sup>ニ</sup>克<sup>チ</sup>礼<sup>ニ</sup>復<sup>レ</sup>ハ、天下<sup>ニ</sup>仁<sup>ニ</sup>帰<sup>ス</sup>、仁<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>為<sup>ル</sup>コト<sup>ニ</sup>由<sup>ル</sup>、而<sup>シテ</sup>人<sup>ニ</sup>由<sup>ラ</sup>ラズヤ、

仁<sup>ニ</sup>とは、本心<sup>ノ</sup>の全徳<sup>、</sup>克<sup>、</sup>勝<sup>なり、</sup>已<sup>ハ、</sup>身<sup>ノ</sup>の私欲<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>なり、復<sup>ハ、</sup>反<sup>なり、</sup>礼<sup>とは、</sup>天理<sup>ノ</sup>の節文<sup>なり、</sup>仁<sup>ニ</sup>は、以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>の徳<sup>ニ</sup>全<sup>スル</sup>所<sup>なり、</sup>蓋<sup>シ</sup>心<sup>ノ</sup>の全徳<sup>ニ</sup>天理<sup>ニ</sup>非<sup>ルト</sup>莫<sup>ク</sup>、亦<sup>人</sup>欲<sup>ニ</sup>壊<sup>レ</sup>ざる<sup>コト</sup>能<sup>はず、</sup>故<sup>ニ</sup>仁<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>とは必<sup>ズ</sup>私<sup>ニ</sup>欲<sup>ニ</sup>勝<sup>チ</sup>テ礼<sup>ニ</sup>復<sup>ル</sup>有<sup>レ</sup>ハ、則<sup>チ</sup>事<sup>皆</sup>天理<sup>ニ</sup>本心<sup>ノ</sup>の心<sup>復</sup>我<sup>ニ</sup>全<sup>ク</sup>、帰<sup>ハ</sup>猶<sup>与</sup>こ<sup>ト</sup>とき<sup>なり、</sup>又<sup>言</sup>一<sup>日</sup>モ

已<sup>ニ</sup>克<sup>チ</sup>礼<sup>ニ</sup>復<sup>レ</sup>ハ則<sup>チ</sup>天下<sup>ノ</sup>の人<sup>皆</sup>其<sup>ノ</sup>仁<sup>ニ</sup>与<sup>スト</sup>、極<sup>メ</sup>其<sup>ノ</sup>効<sup>ノ</sup>の甚<sup>ク</sup>速<sup>ニ</sup>至<sup>テ</sup>大<sup>ナル</sup>コトヲ言<sup>ヘリ</sup>、又<sup>言</sup>一<sup>日</sup>モ仁<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>コト<sup>ニ</sup>由<sup>テ</sup>、他人<sup>ノ</sup>能<sup>ハ</sup>預<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>、又<sup>其</sup>機<sup>の</sup>我<sup>ニ</sup>在<sup>テ</sup>難<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>見<sup>ナリ</sup>、日日<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>克<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>難<sup>シ</sup>ト為<sup>サレ</sup>ハ、則<sup>チ</sup>私<sup>ノ</sup>欲<sup>ヲ</sup>浄<sup>ク</sup>尽<sup>シ</sup>、天理<sup>ノ</sup>流行<sup>シ</sup>、仁<sup>ヲ</sup>勝<sup>テ</sup>用<sup>フ</sup>ベ<sup>カラ</sup>ズ、程<sup>子</sup>ノ曰<sup>ク</sup>、礼<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>、処<sup>便</sup>是<sup>レ</sup>私<sup>ノ</sup>意<sup>、</sup>既<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>私<sup>ノ</sup>意<sup>、</sup>如何<sup>シ</sup>ン仁<sup>ヲ</sup>得<sup>ク</sup>、須<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>已<sup>ニ</sup>私<sup>ニ</sup>克<sup>チ</sup>尽<sup>シ</sup>テ皆<sup>ク</sup>礼<sup>ニ</sup>歸<sup>ル</sup>ベ<sup>ク</sup>、方<sup>ニ</sup>始<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>仁<sup>ト</sup>、又<sup>曰</sup>、已<sup>ニ</sup>克<sup>チ</sup>礼<sup>ニ</sup>復<sup>レ</sup>ハ則<sup>チ</sup>事<sup>事</sup>皆<sup>ク</sup>仁<sup>、</sup>故<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、天下<sup>ニ</sup>仁<sup>ニ</sup>帰<sup>スト</sup>、謝<sup>氏</sup>曰<sup>ク</sup>、已<sup>ニ</sup>克<sup>コト</sup>、須<sup>ニ</sup>性<sup>偏</sup>ニシテ克<sup>チ</sup>難<sup>ク</sup>、処<sup>從</sup>、克<sup>チ</sup>將<sup>テ</sup>去<sup>ル</sup>ベ<sup>シ</sup>、（原<sup>漢</sup>文、一六<sup>丁</sup>裏一七<sup>丁</sup>表）

と。  
次に、嘉点『論語集註』の解釈をよく反映しているとされる綱齋と強齋の各『論語師説』から、適宜解説を参照しよう。

嘉点集註「仁とは、本心の全徳」について、綱齋は「仁ハ聖門ノ大端、目アテニテ、人ト生レテ一生ノオチツキ処」（十四卷、墨付一丁表）という。つまり、人が修養によって生涯目指すところが「仁」である。次に「本心」とは「自然ノダイノナリヲ云」（同、一丁裏）とある。つまり、見聞したままを思う自然の心を指す。「全徳」の「全」について、強齋は「ドコマデモ無瑕ニ、カゲノナイガ全ゾ」（十三卷、三丁表）という。以

上から、「本心の全徳」を、綱齋は「人ノ身ノ生付ノ様」(同、二丁裏)といい、強齋の説を付け加えると、仁は人の身に生まれつき備わった、無瑕のありのままの心の状態を指す、といえよう。そして、この章は、顔淵が、「全徳ニナツテ、人タル心ニ成タイ」(綱齋、三丁表)、「何トゾ本心全徳無瑕ノ人ニナリタイ」(強齋、三丁裏)との思いから、仁について質問したのだ、とする。

次に孔子の回答となる。まず「克」とは、中途半端に勝つのではなく、完全に勝つこと。すなわち、綱齋は「勝ハスキト手ヲ残ル事モナク、何モ無様ニシオフセル事、ソレ故、克字ハ、ワザバカリデハナイ、氣象ツヨクカカル、氣象デ合点セヨ」(同、四丁表)という。ここでいう「ワザ」とは、行為など目に見える部分をいい、「氣象」とは気質、すなわち目に見えない心の性質をいうのである。すなわち、外見が整っていても、内心が不安定であれば、「克」とはいえないのである。

もちろん、「克」の対象は「己(己)」である。その「己」について、綱齋は、

我がソレニドウシタイ、カウシタイト、ツイテマハルガ、私欲ナリ、何コトトサス事モナク、子ハ見レバカハユイ、食ハヨイ物クヒタイ、我カラヨイ様ニシタイヲ、私欲ト云、

コレヲ己ト云ゾ、和訓ニ、ワタクシトヨメドモ、ヲノレト云合点ガナイゾ、ヲノレト云ハ、何トシテモ我身ノヨイ様ニ(トシタウ、我カラミレバ、左云事ガ、ハゲニクイゾ、天下トリガ、天下ヲ失フモ、学者ノ身ノクヅルルモ、ツカヘノ命トル様ニ、此己一字ニアルゾ、人ノ身ヲ、身ノ様ニサセスハ、此一字ニアル、人心惟危ト云モ、人欲ト云モ、此事ゾ、(同、四丁表裏)

という。つまり、身に生まれ付いた無瑕な心を發揮したいが、そうさせないのが私欲で、それを持つのが「己」である、という。ただ綱齋の説明では、闇齋が「己(己)」をなぜ「ワタクシ」と読ませたのが少し分かりにくいので、強齋の説明で補つておこう。

私トヨムガ己ノ字、ヲノレハ、ヲレガ身ト云ヘバ、面々親切ニ持マヘニナツテ居ル、ヲレト云ホド親切ナモノハナイ、(中略)ヲレガ身ナリノトアリタイ、角アリタイト、親切ニハバリ付テ居ルユエ、身之私欲ト注セラルルゾ、(中略)シミジミト覚ル身ナリカラ、ハバリ付テ居ルガ私欲ゾ、己ト云字デ已ナリガ私ニナルユエ、己ヲカヘ、スクナシニ、ワタクシトヨム、ココガキハメテ大事、(同、四丁表裏)と。すなわち、「ヲノレ」とは、「ヲレガ身」のことである。そ

の身に私欲がへばり付いているから、己を「ワタクシ」と訓んだ(また、それゆえに「己」を「巳」とも表した<sup>(13)</sup>)。もちろん、「己ヲノケテ仁者ニナリヤウハナフテ、身ト云シミジミトシタ、カハユイモノナリニ、ドチヘシテモハナレヌ私欲ト云モノガアル、コレガハエヌキノ己ヲソコナフモノ」(同、五丁表裏)であるから、この私欲に完全に勝って、己の身(巳)から私欲を削ぎ落とさねばならない。そうすれば、身は生まれついたままの本心の全徳に復り、仁者になるといふ。

次に「復礼」について、綱齋は「復礼ト云ハ、本法ノカウナケレバナラス、ト云事ガ有ウホドニ、ソコヘシタテナラス様ニスレバ、復ト云モノゾ」(同、七丁裏)という。すなわち、本法へ仕立て直すことが「復礼」なのである。なお、「礼」とは「天理の節文」である、と『論語集註』の朱註にあった。それについて、綱齋は「天理之節文也、天理ハ毎度アル事ナガラ、人ノ身ノ自然ヲサシテ云、本心之全徳ト云、節目ヲ語レバ、天理ト云モノ、火ハモユルガ自然、親ハ愛イガ天理、恥シイハ恥シイ自然ノ生ノママナリヲ天理ト云」(同、四丁裏)と。つまり、身に生まれ付いたままの状態が「本心之全徳」であるが、それが「天理之節文」でもある。

ならば、「復礼」を「復理」としても良さそうだが、それを「復

礼」とするには理由がある、と弟子の強齋はいふ。すなわち、「然ラバ初ヨリ、復理ト云テヨサソウナモノヲ、礼トアルガ大事、礼ハ節目ナリノ日用、ソレゾレ事実、(中略)惣ジテ日用ノ事実ヲハナレテ、人ノ身ハナイユエ、節目ノソレゾレノ場毎ニ、過不及ナイノリヲ礼トハ云」(同、六丁裏〜七丁表)と。そして、

礼ヲハナレテ、心ノ実ハナイハズ、(中略)事実ヲハナレズ、場毎ニ目ゼメニノリガアル、カウナケレバ、工夫ニハナラズ、(中略)事実ガ道理ニアハネバ行ヌ事、理ハ節目、礼ハ事実デ云、ソレデ天理之節文トアル、克己ノ工夫、事実ヲハナレズ、私ハ身ニヘバリ付タ病、コレガ事実ヲハナレテナイ、己ガ天理之節文トウラハラ、ココガ大事ノ旨、工夫ガジカジカト実地ヲフンデユク、理ト云ヘバ、バツトキコヘル礼ト云テ、工夫ノ実ガ目ゼメニナル、ソレデ復理トナイ、聖門學術ノ大事ガコレゾ、(同、七丁表裏)

という。すなわち、形而上ではなく形而下で説明するから「復理」ではなく「復礼」なのであり、それが「聖門學術ノ大事」でもある、というのであった。

このことは師の綱齋も、「朱子以来、天理ト云ヘバ、只形而上ト云カラシテ、一段ナモノト思フテ、別ニハメテミタガル、

大ナアヤマリゾ、食クフモ、物云モ、往トシテ、此天理ニアラザル事ナイ」(同、六丁裏)と説く。そして、「天理ト云ガ、ヲキモノヲサズ人欲トナル、(中略)善ニナルモ、悪ニナルモ、兎ノ毛セツテ、ココニアルゾ、其スレアフ処ガ、礼ト云、己ト云ノ間ナリ」(同、七丁表)というように、善悪は身に付いた私欲によって紙一重の状態なのである。したがって、「人心惟危ト云モココソ」(同、七丁表)というのであった。だからこそ、事実から離れず、それを取り除く工夫を重ねることを「復礼」をもって教えたのである。

次に「為仁」について、綱齋は「ヒタト私欲ニ克テ復礼スレバ、日用ノ事実ナリニ、ソロリソロリト粗暴ナコトモ去リ、ソソロモ落テ、今日モヨクナリ、明日モヨクナリ、ドコトモナウ日用ナリニ、心ガ本心ニナル、本心ナリガ日用ニナル、ソレデ克己復礼カ仁デモナク、又克己復礼シマウテ、仁ガ外ニアル、ト云事モナイ、克己復礼ナリニ心徳トナルゾ」(同、八丁裏)と説いた。つまり、身に付いた私欲に勝って復礼すれば、徐々に日用で心が本心にもどっていく、すなわち仁の状態に近づいていく。したがって、「私欲ニ克去テ、本法ノ処ニツメテユクト、独リ本心ナリヲ得テクル故、為仁ト云ゾ」(同、九丁表)となる。ところが、克己復礼すれば、それが仁である、と誤解して、

「己ニ克、礼ニ復ルヲ仁トス、トミルハ、アヤマリゾ、(朱子)語類ニモ大分其吟味アリ、(闇齋も)文会筆録ニ尽サレタゾ、ソレ故、己ニ克チ、礼ニ復リ、仁ヲ為、トヨム、克己復礼ヲ仁トス、トヨムト、大キナアヤマリ」(同、九丁表、カッコ内は引用者が補った)と、綱齋は付け加えた。つまり、ひとつひとつ丁寧クリアしていく中で、自然と仁に近づいていく(「仁をす」のであって、条件さえクリアすれば、一気に仁になる(「仁とす」、というものではないと注意したのである。また、それは大事なことゆえ、「克己復礼ヨリ外ニ仁ニ入様ハナケレドモ、克サハスレバ、モハヤ仁ト云事デハナイ、克己復礼ハ、ワザノ上デ、ヒタト克オフセ／＼シテユク内ニ、ドコトモナウ仁ニナリ得テ、自然ニ我ニ得テクル事」(同、一三丁表)である。だからこそ、「克己復礼スレバ、モハヤ仁トモ云ハレス、克己復礼シツツ、ソレナリニ本心ニナリ得テクルコトヲ云」(同、一三丁表)のだ、と繰り返し説いたのである。

強齋の「為仁」説も見ておこう。「為仁ハ、工夫ニナツテノ詞ユエ、所以全其心之徳トアル、本心全徳ガ、ソコネテ居ルヲ、モトノモノニ仕ナホシテユクヲ云ゾ、為仁ハ、ドウシタモノナレバ、心徳ヲ全フスルヨリナイゾ、克己復礼デ全フナルユエ、所以ノ字デ云テアルガ、ソレゾ」(同、七丁裏)という。すな

わち、心の徳を全うするための工夫として克己復礼を行う、それが「為仁」へと続く。さらに、「克己復礼」が「仁」トヨムガ正意、(闇齋の)大和小学、(文会)筆録ニモ、此センギアリ、克己復礼スグニ仁ト云事デナイ、為仁(仁とす)トヨムハワルイ、仁ハ本心ノ徳、全イ上テ云、克己復礼ハ工夫デ云事、前ノ注ニ所以全其心之徳也トアルガ、ソレ、克己復礼ヨリ仁ハナイガ、ソレガスグニ仁ト云ハ、ソデナイ(同、一三丁裏、カツコ内は引用者が補った)と注意した。したがって、「克己復礼ハ工夫デ、コレガスグニ仁デハナイ、熟シニシテ仁ナリニナルガ、為仁(仁をす)ト云モノゾ」(同、一五丁表)と説いたのである。

このように「克己復礼為仁」とは、己の身に付いた私欲に完全に勝って、本心に復帰できるように工夫すれば、日に日に仁に近づき心徳が高まってゆく、とするのが朱子の意図するところ、決して克己復礼が仁である、とか克己復礼すれば、すぐに仁になる、というのではない。闇齋らもそうした朱子の考えを遵守したのである。次に闇齋の各著書から適宜検討すること、そのことを確認したいと思う。

#### 四、「為仁」に関する闇齋説

『論語集註』に程子が克己復礼すれば「是仁」との説があり、それは朱子の「為仁」説と異なる、との誤解が従来からあった。それについて闇齋は、『文会筆録』四之三に『朱子語類』の一文を引いて批判する。

○語類ニ、問<sup>ラ</sup>程先生ノ云<sup>ハク</sup>、須是己私ニ克<sup>シテ</sup>尽<sup>シテ</sup>皆礼帰<sup>ル</sup>べく、方<sup>ニ</sup>始<sup>テ</sup>是仁ト、恐<sup>ク</sup>是仁ノ字、為仁ノ字と意相似せず、と、曰<sup>ハク</sup>、那箇ニ克去<sup>レ</sup>ハ便<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>這箇、蓋己私ニ克去<sup>レ</sup>ハ便<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>天理、己ニ克<sup>チ</sup>礼ニ復<sup>ル</sup>、仁<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>所以なり、仁ハ是<sup>レ</sup>地頭、克己復礼ハ是<sup>レ</sup>工夫、那ノ地頭ニ到<sup>ル</sup>所以<sup>ニ</sup>底、(九六丁裏)九七丁表)

と。右の文章は、程子説の「是仁」と朱子説の「為仁」の意味が相違する、との質問に、朱子が答えた一文である。そのなかで朱子は、「那箇」に克ち去れば、便ち是れ「這箇」、という文章構成にもとづけば、「己私」に克ち去れば、便ち是れ「天理」すなわち「是仁」、という文章になる。 「己」に克ち礼に復える、それが「仁」に近づく所以だが、そもそも「仁」とは、「地頭」すなわち修養の果てに心の落ち着く場所、 「克己復礼」

とは、そこに到るための「工夫」である。とすると、程子も文章構成上「是仁」と言ったままで、すぐに「仁」である、と言ったのではない、と。

この問題について、浅見綱齋『論語師説』一四で、次のように説明する。前述の引用と重複する箇所があるが、煩瑣を厭わず引用しておく。

俗説ニ克己復礼ト云ハ、事ニツ、克己復礼ニナルト、モハヤ仁ト云ガ程子ノ説ナリ、克己復礼シテ、又為仁ト云ガ朱子ノ説ト云、末書ハ其通り吟味スル者ガエテハ、程子ハ克サハスレバ、モハヤ仁ト云ハレテ、違ガアルト云ガ、知ラヌ故ゾ、(中略) 克己復礼スレバ、モハヤ仁トモ云ハレヌ、克己復礼シツツ、ソレナリニ本心ニナリ得テクルコトヲ云、ソレ故、程子ノ方始是仁ト云ハルル処ガ面白イ、カウヒタトシテ熟シテ至ラバ、氣象ガ違テ、方始是仁、ソコデコソ仁ニナルト云テアルコトゾ、(一二丁裏―一三丁表)

と。綱齋は、程子が「方始是仁」と言ったことに注目した。つまり、程子も、種々の工夫を積み重ねていけば、「方始是仁」と言っているのであって、朱子が言うところの「為仁」と違はないのである。

それについて、強齋の『論語師説』一三も「程子ノ方始是仁

トアルハ、克己復礼ガ直グニ仁デナイ、ヒタト克己復礼ノ熟スルナリニ、アカガヌケテ、自得氣象トトモニ得テ来ルヲ云レタモノ」(一四丁裏―一五丁表) で、朱子の言う「為仁」と同意というのであった。

次に闇齋は、『文会筆録』四之三に、『春秋左氏伝』昭公十二年の記事にある「克己復礼」について、『朱子語類』八三を引く。

○語類八十三、楊至之間、左伝元は体の長、等ノ句、是左氏、孔子ノ語ヲ引<sup>レ</sup>、抑古此語有<sup>ル</sup>カ、曰<sup>ハ</sup>或<sup>ハ</sup>是古<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>此語有<sup>リ</sup>、孔子他引<sup>ル</sup>未<sup>ダ</sup>知<sup>ル</sup>ベからず、左伝ニ又云、已<sup>ニ</sup>克<sup>チ</sup>礼<sup>ヲ</sup>復<sup>ス</sup>仁なり、克己復礼ノ四字モ亦是古<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>此語有<sup>リ</sup>、(九七丁表)

と。「克己復礼仁也」は、『春秋左氏伝』の頃からあって、それを孔子が引いた、との朱子の説を指摘しつつ、その最後に闇齋はコメントを割り注にして挿んだ。それが、

嘉謂、為<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>加<sup>ハ</sup>夫<sup>ノ</sup>意歟、

である。つまり、『春秋左氏伝』には、「克己復礼仁也」とあったのを、『論語』で「克己復礼為仁」と「為」の字が加えられたのは、孔子の意図であろうか、というのである。こうした疑問を付したのは、「為仁」に注目していたからであり、それにそつた解釈をしたのが朱子であり、それを再評価したのが闇齋で

あった。また、綱齋や強齋ら崎門学者も、師説を批判継承したのである。<sup>14)</sup>

このように嘉点が『論語集註』の意図に適うもの、との闡齋の主張は、朱子の言葉を博搜し検討したことからの確信であったといえよう。

### 五、「克己」に関する闡齋説

ここでは「克己復礼」の「克己」について検討する。

闡齋が「克己」の「己」を「わたくし」と読んだことは既述した。その「私」ついて著したのが、闡齋の『仁説問答』（朱子の「仁説」（『朱子文集』巻六七）と仁説図（『朱子語類』巻一〇五）そして張南軒・呂東萊との問答六篇とを編集した、闡齋五十一歳の書）である。それを詳細に講義した綱齋の『仁説問答師説』から見てみよう。

そのなかで、「カナシイコトハ、身ト生ル、ト、己ヒトリノ持マヘニナリ、己ガ身ナリニミヘテクル」（二二六頁）とある。すなわち、残念なことだが、人は身をもって誕生すると、いつのまにか本来の身を忘れ、己れひとりの所有物である、と誤解するようになり、その結果、身に「私欲」が付いてしまう。そ

の「私欲」の付いた身を持つ「己」を、「わたくし」と呼んで区別したのである。

ところで、「私」の対義語は「公」である。ならば、「私」を取り除けば「公」になり、それは「仁」なのか、というと、そうではない。綱齋は「公ハ私ヲ克<sub>ち</sub>去<sub>る</sub>。功夫ノ力ヲ用ル字ジヤラ、何モ角モ一クルミニ天下万物同体ジヤ、ソレガ仁ジヤト思ハルハ、大ナトリチガヘゾ」（二七九頁）と注意する。しかも、「公ハ仁デハナイ、私ノナイコトヲ云テ、克己ノ目当ゾ」（二七三頁）、「公ハ心ニヘダツル私ヲ克去ルコトジヤ」（同）という。そして、「身ニ私ガアレバ、真味ノイトヲシヒ親切ナ情ガナイユへ、其私ヲ克去<sub>ら</sub>レバ、未発本然忍ビザル心ガ、親ヲ愛スル心トナリ、君ヲイトヲシム心トナルユへ、公ガ仁ニ近ヒト仰ラル、」（二七九頁）のである。

すなわち、身に私欲があれば、自分のことは可愛いが、他人のことまでその情が及ばない。それを「真味ノイトヲシヒ親切ナ情ガナイ」という。「真味ノイトヲシヒ親切ナ情」こそが「公」なのである。それを持ったならば、身についた心は「未発本然忍ビザル心」すなわち「本心」になるから、「親ヲ愛スル心トナリ、君ヲイトヲシム心トナル」。つまり、他人のことまで自分のように考えられる情、すなわち「公」ができるから、「公」

は「仁ニ近ヒ」と程子が仰せられたのであって、「公」がそのまま「仁」を表すものではない。

「このように「公」とは、「私」を取り除く克己の目標にすぎなく、たとえ「公」になったとしても、それがそのまま「仁」ではなく、あくまで「仁」に近づいたことを表すものであった。

ところで、綱齋は、「平生養身カラデナケレバ、克己ノ力ガ出（二六三頁）せないという。つまり、平生から高い志をもって修養しないと、急に克己の力を出そうとしても、出せないというのだ。ならば、「存養」の上で「大力量ヲ出」せば、克己の力が發揮でき、身から私欲を去った仁者に戻れるのか、といえば、それでもまだ不十分であるという。

では、どのようにすればよいのか。その具体的な方法が、「朱子の思想の眼目」（近藤啓吾「解題」『垂加神道 上』）をあらわした『玉講附録』（保科正之・山崎闇齋編、闇齋四十八歳）にある。それを講じた綱齋の『玉山講義師説』を次に見てみよう。綱齋は、そのなかで、克己の力を發揮させるためには「聖人の道」（『本法』）を学ばなければならないとする。すなわち、「（本法を）学（まなむ）デナケレバ、本然ノ道アリテモ、人欲ニ克チ氣質ヲ変ジテ、本法ノ身ニ立テ、復スルコトナラズ」（六一七頁下段）という。しかも、「本法ノ身ニナリタイト歎イテ、己

ガ身ノ為メニスル」（六一九頁上段）との切実さがなければならず、それが「本法ノ学ブト云フノ本意（同右）だ、とする。

すなわち、切実なる思いで本法を体認してこそ、克己のわざも發揮できるのである。そのことは綱齋の『論語師説』一四でも、

「私欲ニ克去テ、本法ノ処ニツメテユクト、独リ本心ナリヲ得テクル、故為仁ト云ゾ」（九丁表）とは、既述した。

それは、山崎闇齋も「仁説問答序」で、

玉山講義三云、（中略）先其ノ名義ヲ理會シ、其ノ意味ヲ体認シテ、然シテ後ニ敬・恕之功ヲ致シ、克・復之力ヲ用ヒ、則（すなわ）其レ之ヲ

得ルニ庶カラシム。此レ乃（すな）朱先生人仁ヲ求コトヲ教ル之意なり、（原漢文、一丁表裏）

と説く。すなわち、まず「仁」の名義を正しく「理會」し、その意味を「体認」する。次に平生から身を養う「敬」と、その心を人に及ぼす「恕」が持てるよう功夫に努める。その上で、「克己復礼」の力を用いれば、きつと「仁」が得られよう。それが朱子の人に仁を求めることを教える趣旨、というのであった。

綱齋は「仁説問答師説」で、闇齋のこの序文をより丁寧に見ている。

先ツ仁ハイトラシムト云字ジヤト名義ヲ合点シテ、イトヲシムト云ハカウジヤト、身ニ切ナ意味ヲ体認シテ、ソコデ

功夫ハ用ラル、ゾ。理會ハ、トクトノミコムカラ云。体認ハ、身ニウケツカマヘテ身トトモニ味<sub>ミ</sub>カラ云。ムカフノ理デスマシヅクナシニ我身ニウケテ、身ナリカラシテトメテミルコトゾ。コレデ仁ノ仁タル真実ノ持マヘガスミテ、ソコデソレニ至ルノ道ハ、コノ心ヲ失ハヌヤウニ、ソコナハヌヤウニ、平生身ニ養<sub>ニ</sub>ノ敬、コノ心ヲ推シテ人ニ及スノ恕、コノ心ヲ害フ己<sub>ニ</sub>ニ克チ本法ノ礼ニ復ル、(中略)理會体認ハ、コレヲ知ルコト、敬恕克復之功ハ、コレヲ行テ身ニ得ルコト、コレガ朱先生「仁說」ヲ作スノ旨ナリ。(二九二〜三頁)

このように闇齋や綱齋ら崎門学者は、朱子や程子らの学説をひたすら丁寧かつ正確に読み解くことに専念していたことが確認できよう。

## 六、「復礼」に関する闇齋説

次に「克己復礼」の「復礼」について検討する。

前述したように、「復」を「反える」と解釈するのは、朱子学の特徴である。また、「克己復礼仁也」との言葉が『春秋左

氏伝』にあることは、闇齋も知っていた。ただし、闇齋が注目したのは、『論語』に「克己復礼為仁」と「為」の字が加わったことで、それは孔子の意図であるのか、と指摘していたのである。そして、この「為」字が加わったことで、克己復礼が、仁に復帰するための工夫となり、それを繰り返し続けることで、自ずと仁に近づくと解したのが朱子であり、闇齋がそれを再評価したところに崎門学の特徴があった。

その仁とは、人を指す。闇齋は『文会筆録』四之二で、「身モ亦己也、中庸仁者人也、章句ニ、人ハ身ヲ指シテ言フ、程・朱、仁・恕ノ字義ヲ解スルモ、亦皆己ノ字ヲ以テ之ヲ説ケリ」(原文、五三丁裏〜五四丁表)と説いた。すなわち、『中庸』に仁は人なり、とあり、それを注釈した朱子の『中庸章句』は、人は身を指して説いている。その身(己の身)には、私欲が付着するから己(わたくし)というのであり、程子や朱子が個人に向けた修養の目的である「仁」や、他人に向けた慈愛の行動である「恕」の字義を解釈するのも、みな己(私欲が付着した己の身)を対象に説いたのであった、というのである。

そこで闇齋は、「敬」を強調する。たとえば、「敬齋箴序」(朱子「敬齋箴」をはじめ朱子学者の敬説を編集した、闇齋三十歳代の書)で、「人の一身、五倫備<sub>テ</sub>身<sub>ニ</sub>主<sub>ル</sub>者ハ心なり、是故<sub>ニ</sub>心敬<sub>ハ</sub>、

則チ一身修テ五倫明カナリ」(原漢文、六丁表裏)といい、「蒙養啓発集序」(朱子の『小学』『大学』の間答を編集した、闡斎五十一歳の書)でも、「君子已レ脩ルニ敬ヲ以テス、親義別序信止レハ、則チ天下の能事畢ル」(一丁表)と説いた。

また、敬義内外説でも、内とは心と身をもつ人を指すとす。たとえば『文会筆録』七之三では、「敬ハ則チ本体ノ守、乃チ已ヲ成スノ仁也、(中略)程・朱、専ラ心ヲ指シテ内ト為スノ説、之レ有ルハ、喫緊切要ノ為、但シ易之本指ニアラザル也」(原漢文、六二丁表)と。すなわち、敬とは、生まれ付きの身である仁を守るのだが、時に程子や朱子は心だけを指して内とし、内から身を除くことがあった。だが、それは「喫緊切要ノ為」であつて、「易之本指」すなわち『易』本来の趣旨ではなく、決して身を外とするものではない。つまり、人を心身一体として見、それを仁にするために敬しむ、と見た。よつて、敬とは、「克己復礼」と同義であり、「朱書抄略跋」(『垂加文集』五所収、朱子の「敬義内外説」を編集した闡斎六十三歳の書。この年、綱斎・直方破門)でも、「已ヲ成スハ仁也」「已ヲ成スハ内也」(一〇丁表)と説くのである。

このように、人は身をもつて生まれるが、身には私欲が付着する。よつて、それを削ぎ取り、生まれたままの身になるよう

努めなければならぬ。そのためには、身を主宰する心を敬しむことが必要であつた。なぜならば、敬とは、「克己復礼」を意味するからで、たとえそれが成就したとしても、すぐに仁に復帰するのではなく、徐々に仁に近づく、としたからである。

綱斎は、「復礼」を「今サウナイヲ、本ノ様ニスルコト」(『論語師説』一四、四丁裏)だと説明する。もちろん「本ノ様」とは、「礼」のことである。『論語集註』の朱註に、「礼者天理之節文也」とあつた。また、その「天理」とは、「人ノ身ノ自然」(同、四丁裏)を指し、かつ「本心之全徳」を指した。ところが、「天理」は自然だけに、かならずしも善の方向へ向くとは限らず、反対に悪の方向へと向かつて、人欲に変化する危険性も秘めている。よつて、「天理」だけで「礼」を認識するには不十分であるから、「天理」に「節文」を加えて、人欲と礼とを明確に区別するようにしたのである。

つまり、「節文」とは、過不及無き「則」、すなわち善へ向かうための決まりごとである。よつて「天理之節文」が、「礼」となる(同、五丁表)。とすると、「克己復礼」とは、私欲ある身から、さまざま工夫を要して私欲を克ち去り、かつ「則」という「本法」を目標に、私欲のない自然の身、すなわち「本心之全徳」に戻る手段を意味した、といえよう。

ところで、綱齋は『玉山講義師説』で、「丁度神道ノ正直ト云フハ、ヨイコトナレドモ、是非・邪正ノ吟味ナケレバ、一途ニ親ヲ捨テ、出家シタイト云フモ、正直ユエ、義ヲ離レテ無面目ナ正直ハ、役ニ立タヌゾ」(六三四頁下段)という。神道では、中世以来、正直・清浄・慈悲を用いて「三社託宣」を説いた。この三つの言葉は、いずれも仏教語であり、なかでも仏教では慈悲をもっとも重んじたが、神道では正直をとくに重んじ、「三社託宣」でもっとも尊貴な「天照皇大神宮」の託宣に用いられた。このように神道では、正直を重んじ、綱齋もそれは結構なことと評価する。だが、残念なことは、「正直」を唱えるだけで、「是非・邪正ノ吟味」がないのが問題である、と批判した。なぜならば、義の吟味のない「正直」は、「役ニ立タヌ」からである。

以上を「克己復礼」に入れ替えて吟味すると、次のようになる。つまり、「復礼」の「礼」の義、すなわち「則」である「本法」を吟味しなければ、どれだけ工夫しても仁に戻れず、「克己」も「役ニ立タヌ」ことを意味しよう。綱齋が『玉山講義師説』で、「克己復礼ト云フモ義ノ吟味ニシテ、其帰スル処ハ、本心全フ成リ得ルヨリ外ナイ」(六三四頁上段)と説くのも然りで、『論語師説』一四で「私欲ニ克去テ本法ノ処ニツメテユクト、独リ

本心ナリヲ得テクル故、為仁ト云ゾ」(九丁表)と説いたのである。

ところで、綱齋と強齋は、各々の『論語師説』を見る限り、私欲の原因を「邪氣」と見ていたようだ。よって、邪氣を追い払うことが「克己」を意味し、それを繰り返して続けているうちに「本法」に戻る(「復礼」と考えた。しかし、身の気から「邪氣」を追い払う工夫を繰り返しても、身の気が「元氣」に戻らなければ、その工夫は不十分である。したがって、強齋は「本法ノ元氣」を取り戻してこそ、はじめて「復礼」である(『論語師説』一三、九丁裏)、と説く。なお、その「邪氣」については、闇齋も「会津神社志序」で説いていた。

#### 七、「会津神社志序」から見る闇齋の神道説

垂加神道は神儒兼学の成果である。よって、闇齋が「克己復礼為仁」を神道的に説くのも、当然の成り行きであった。それを表したのが、闇齋が垂加靈社号を受けた寛文十一年(一六七二)五十四歳の翌年に著した「会津神社志序」である。

『会津神社志』とは、保科正之が子の正経に命じて、会津藩と天領の南山御藏入領を含む会津郡、耶麻郡、大沼郡、河沼

郡の中から、淫祠や神仏習合色の色濃い神社、いわゆる邪神を祭る神社を排除し、それ以外の由緒正しき神社、すなわち正神を祀る神社二八六社を選別編纂した神名帳である。闇斎はその序文で、神に正神と邪神とが異なる理由を説いた。左の通りである。

会津神社志序

(前略) 惟神ハ、天地の心、惟人ハ、天下ノ神物ニテ、其心ハ、則チ神明ノ舍ナリ、抑天下万神、天御中主ノ尊の化所ニシテ、正神有リ、邪神有ルハ何ソヤ、蓋天地ノ間、唯理ト氣トニシテ、神ハ理の氣ニ乗出入スル者ナリ、是故ニ其氣正ケレハ、則チ其神正シ、其氣邪ナレハ、則チ其神邪ナリ、人能ク静謐混沌の始ヲ守リ、邪穢ヲ祓ヒ、精明致シ、正直ニシテ、祈禱スレハ、則チ正神福ヲ申メ、邪神禍ヲ息ム、豈敬マサルベケンヤ、(後略)

(原漢文、五丁裏一六丁表)

すなわち、人は神靈(神明)を身に宿すから、身は「神明(舍(いえ))」という。そもそも天下の万神(万人・万物も含む)は、原初の神である天御中主尊の神靈(分靈)より化生した。したがって、全ての神は天御中主尊の神靈を宿している。にもかかわらず、世の中には正神ばかりでなく邪神もいるのは、一体なぜだろうか、と自問した。そして闇斎は自答する。思うに「天地之間」には、ただ理と氣のみがあつて、天御中主尊の神

靈は、「理の氣」に乗り、この世に出入する。よって、その氣が正しければ正神になり、その氣が邪なれば邪神になる、と。

その対処を、朱子学でいうところの「克己復礼」の方法で説けば、人は先天的に正神(仁、本心)を受けているが、後天的に身に「邪氣」が乗り移つて私欲がへばり付く。そうならば、小人・禽獣になる危険性がある。そこで、私欲を克ち去つて本法(聖人の道、神道でいえば、「大日靈貴之道」〔『風葉集首巻』〕に戻さなければならぬ、となろう。

それを神道的に説明したのが、序文の後半にあたる。つまり、人は十分に心を静め穏やかにして「混沌之始」、物事が萌す前の姿、すなわち身に宿す原初の天御中主尊の神靈(「心神」「幸魂奇魂」)を、そのまま大切に守る。それは伊勢神道でいうところ「左左右右、元元本本」を遵守する教えに当たり、また出雲大社に見られる大国主神が赤玉(「心神」「幸魂奇魂」を指す)を両手で抱えた像となろう。そうした行いを垂加神道家の跡部良頭は「恩頼ヲ蒙テ、被瓊ノ徳ヲ希フ」(「垂加翁神説序」)こと、と説いた。ちなみに、朱子学でいえば「本法」を守ることにとたろう。次に邪穢を祓つて身を清らかにし、心を真っ直ぐにする。これは神道でいうところの「祓」だが、朱子学でいえばまさしく「克己復礼」に通じよう。

最後に、より神道的な境地が説かれる。祈禱すなわち一心不乱に神を祈れば、正神は幸いをもたらし、邪神は禍をやめるであろう、と。これは『倭姫命世記』などに見られる天照大神の神勅「神垂祈禱・冥加正直」に通じよう。一心不乱に神を祈る（祈禱）と、神はそれに応えて天から降りてこられる（神垂）。ただし、神の御加護を賜る（冥加）には、心を真つ直ぐにした清らかな身の状態（正直）でなければならぬ。この神勅は、もともと天照大神が神宮の神職に賜ったお言葉であるが、闇齋もこの教えを生涯大切にし、この八字から「垂加」の靈社号を採ったことはよく知られている。そして、序文の最後に、だからこそ「敬しまざるべけんや」と主張したのである。

### おわりに

『会津神社志』の闇齋の序文によれば、わたくしどもの身は「神明/舎」である。それは先天的に正神を心に宿しているからだ。だが、「邪氣」によって身に私欲がへばり付き、正神の状態から離れていく。したがって、人は十分に心を静め穏やかにして「混沌之始」（朱子学でいえば「本法」にあたる）を守り、邪穢（朱子学でいえば私欲にあたる）を祓って清らかにし、真つ

直ぐな心になければならない。これは、朱子学でいうところの「克己復礼」に通じよう。さらに神道では、一心不乱に神を祈れば、正神は幸いをもたらし、邪神は禍いやめるであろう。なぜならば、身には正神が宿り、その状態を維持すれば、邪神は身に近づかないからである。だからこそ、その状態を保つためにも敬しまなければならぬ。そうすれば朱子学でいうところの「為仁」になる。つまり、聖人に近づいていく、ということである。

こうして闇齋は、儒学の「克己復礼」が、仁者（聖人）の境地をめざす工夫であるならば、神道の「神垂祈禱・冥加正直」は、素戔嗚尊や大己貴神が辛苦の末に達した境地、すなわち天御中至尊を体現する天照大神の御徳義と合体した境地をめざす工夫、と考えたのであろう（『神代記垂加翁講義』）。

そして、『日本書紀』を編纂した舍人親王が、それを体現した、と闇齋は考えた。よって、闇齋は舍人を「とねり」と読まず、「ひえひと」と読む（『風葉集首巻』三二六頁）。それは「神明/舎」を具現した人（垂加神道でいえば生祠の「靈社」にあたる）であり、儒教でいうところの「仁者」を意味するからであった。したがって、闇齋は生前の保科正之を讃えて、「実<sup>ニ</sup>弓兵政所<sup>キョウヘイシマシタマヒ</sup>崇道<sup>キョウドウ</sup>尽敬<sup>キョウケイ</sup>天皇（＝舍人親王）以後、一人<sup>ヒト</sup>」（「土津靈神/碑」

三丁裏」と追悼したのであり、また孫弟子の跡部良顕は、闇斎を「舎人親王以来一人」（垂加翁神説序）」と讃えたのである。

参考文献

山崎闇斎

嘉点『論語集註』（薩摩府学蔵版、嘉永七年、國學院大學図書蔵所蔵）

『文会筆録』（早稲田大学図書館所蔵、古典籍総合データベース）  
『会津神社志序』（『垂加文集』上之一、早稲田大学図書館所蔵、同右）

『土津靈神碑』（『垂加文集』中之一、同右）

『仁説問答序』『敬斎箴序』（『垂加文集』中之一、同右）

『朱書抄略序・跋』（『垂加文集』中之一、同右）

『大和小学』（山崎闇斎 上巻）日本教育思想大系、日本図書センター、昭和五四年）

『風葉集首巻』『神代記垂加翁講義』（近藤啓吾校注『垂加神道 上』神道大系編纂会、昭和五九年）

浅見綱斎

『論語師説』（国士館大学図書館楠本文庫所蔵）

『仁説問答師説』（西順蔵・阿部隆一・丸山真男校注『山崎闇斎学派』日本思想大系31、岩波書店、昭和五五年）

『玉山講義師説』（清水則夫・三浦國雄監修、舞田敦編『浅見綱斎全集稿本』中巻、ぺりかん社、令和四年）

若林強斎

『論語師説』（無窮会専門図書館織田文庫所蔵）  
跡部良顕

『垂加翁神説序』（前掲『垂加神道 上』）

瀧川亀太郎纂標・原田種成増注『纂標論語集註』（松雲堂書店、昭和四七年）

吉川幸次郎『論語』中（中国古典選4、朝日文庫、昭和五三年）  
土田健次郎訳注『論語集註』3（東洋文庫85、平凡社、平成二六年）

吹野安・石本道明『孔子全書』第六巻『論語6』（明德出版社、平成十三年）

石本道明・青木洋司『論語 朱熹の本文訳と別解』（明德出版社、令和五年）

注

- (1) 闇齋はじめ崎門の「克己復礼為仁」については、拙稿「崎門と訓蒙」(西岡和彦・石本道明・青木洋司編『江戸期』論語 訓蒙書の基礎的研究 明德出版社、令和三年所収)で少し論じた。そのなかで、浅見綱齋『論語師説』八(述而第七)を引き、「克己復礼」は、「博文約礼」とともに人が道に外れない行動を日々積み重ねよ、との教えが、「結果的に「為仁」ことにな」る。また、同書七(雍也第六)を引き、「博文約礼」の「文」とは、「聖人」が遺した書物を指し、それを通して「聖人」の道を得く、かつ徹底的に、しかも正しく学ぶことが「為仁」ことである」から、「賢人」の教を通して(それを)理解する事が必要」としたことを説いた。(以上、二四頁)また、小島毅氏は、「朱熹によれば、(中略)復礼によって克己するのが儒教の特長であり、先王の教える正しいやり方である。復礼の礼とは、各人が生まれつき備えている理としての礼ではなく、個別具体的な身体動作である事としての礼である。それゆえ、学んで習得していかなければならない」(『朱熹の克己復礼解釈』、宋代史研究会編『宋代の規範と習俗』汲古書院、平成七年、八五頁)という。小島毅『中国近世における礼の言説』(東京大学出版会、平成八年)ほか参照。
- (2) 闇齋の弟子洪川春海が谷泰山が唱えたといわれる。加藤仁平『和魂漢才説 増補版』(汲古書院、昭和六二年)参照。
- (3) 闇齋の直弟子では、浅見綱齋・佐藤直方・三宅尚齋のいわゆる「崎門三傑」が有名だが、彼らは朱子学を専門とした。ほかに神道を専門とする垂加神道家にも出雲路信直・大山為起・鴨祐之を筆頭に大勢いたが、闇齋のように神儒兼学をもって活躍できたのは、谷泰山のほけいかなかった。なお、植田良背の『良背語録』所収「靈社從学ノ人」では、多くの門人が神儒ともに修めたとあるから、闇齋は基本的に両方を教授していたことがわかる(前掲「垂加神道(上)」四七九〜四八〇頁参照)。
- (4) 谷泰山著『保建大記打聞』の序文に、そのことが打ち明けられている。
- (5) 小島毅氏は「そもそも『論語』の本文をどう解釈するかが、研究者・翻訳者によって異なるのである」(七三頁)り、なかでも「現代日本語訳版は訳者が諸家による注・訳を比較検討して自身の信する「正しい解釈」をおこなっているわけである」(八五頁)という(『論語』の解釈変更―古注から新注へ―『文化交流研究 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』二九、平成二十八年)。
- (6) 土田健次郎氏は、「克己」と「復礼」を朱子が二つに分けるのは誤りで、これは自分を修めるには礼を実践する他は無いということである。「克己」を朱子が私欲に勝つこととし、(\*伊藤 仁齋が(\*『論語古義』で)自分を捨てることとするのはともに誤りで、朱子が「復礼」の「復」を「かえる」と解釈しているのは老子の「初めに復す」(この語自体は『莊子』繕性)の思想である。また礼について朱子は天理を持ち出し、仁齋も臆断をしているが、礼はあくまでも先王の制作したものであって、「非礼・・・」は礼に似ているが礼ではないものを行うなどということである」と説く。そして、「本章を朱子らが個人修養の問題とするのに対し、徂徠はあくまでも仁を天下統治の道とし、それを実現するには個人修養が必須であるという順序で解釈する」(前掲『論語集注』3、三〇八頁)として、徂徠説を肯定した。ただし同氏は、『論語』(ちくま学芸文庫、令和五年)で、「春秋左氏伝」の孔子の語は後の創作の可能性があり、そのまま使用できるものではない(四二八頁)とも指摘する。
- (7) 闇齋自身「述べて作らざるは、嘉の学、願ふところなり」(九丁裏)と主張していた(前掲「朱書抄略序」)。
- (8) 阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』(東京大学出版会、昭和四〇年)、近藤啓吾『山崎闇齋の研究』(神道史学会、昭和六一年)ほか参照。

- (9) こうしたテキストクリティックは、経書のみならず、『日本書紀』などわが国の神典でも行われ、それがテキストになった。「垂加先生編輯梓行書目并外題筆者」(前掲『垂加神道(上)』五一九～五二〇頁)には、「神代卷 下御霊社校」、「神代卷口訣」、「中臣祓」、「神武紀 神代神武紀 下御霊藏板」などが見られる。
- (10) 嘉点『論語集註』については、近藤啓吾「嘉点『論語集註』の研究」(前掲『山崎闇齋の研究』所収)参照。
- (11) 林文孝「仁と為す」か「仁を為す」か—朱熹『論語集註』のもとでの『論語』顔淵篇「克己復礼為仁」の訓読—(『境界を越えて…比較文学の現在』一七、立教大学、平成二九年)に、「仁と為す」と訓読するのが『論語集註』の意図にかなうのか、それとも「仁を為す」と訓読するのがかなうのか、を明らかにすることを目的に、主要な現代注釈書にある和訓を調査された上で、結論として「仁を為す」が正しい、とされた。そして、「克己復礼」とは、本来的な「仁」を實現するための手だてであり、非本来性から本来性を回復する動作・行為として「為仁」が表現されているのだから、「克己復礼」により「仁を為す」のである(三八～三九頁)と。よって、「集註」について「仁と為す」とする解釈は、この時点で誤りといつてよい(三九頁)とする。そして、結論として「朱熹『論語集註』の解釈に従う限り、『己に克ち礼に復りて仁を為す』と訓読する方向での解釈が正当である」(四五頁)とされた。ただし、闇齋はじめ崎門学者は、「為仁」を「仁を為(な)す」ではなく、「仁をす」と読んでいる。本稿では、そこに注目した。
- (12) 若林強斎は『論語師説』(顔淵十三)の最初の所で、「扱書ヲ講スルハ、本文カラ注トヨム事ナレドモ、キハメテハ云ハレス、ドウナリトモ学者ノ本文ノ旨ヲ吞込ヤウニスルカラ、此章ナドハ、注ノシラケタ吟味ヲ聞ネバ、本文デハ云ハレス事ガアルユエ、注カラ読ンテ、本文ヲ引付テ聞スゾ」とある。本稿も、朱子の注を綱齋や強斎の解釈を通じて理解することで、闇齋の訓読が、朱子の意図に適ったものかを確認しようと思う。
- (13) 『文会筆録』四之二に「身<sub>モ</sub>亦已なり、中庸、仁は人なり、章句<sub>ニ</sub>人身<sub>ヲ</sub>指<sub>テ</sub>言<sub>フ</sub>、程・朱、仁・恕<sub>ノ</sub>字義<sub>ヲ</sub>解<sub>ス</sub>ル<sub>モ</sub>、亦皆已<sub>ノ</sub>字<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>之<sub>ヲ</sub>説<sub>ク</sub>、嘉、此已<sub>ノ</sub>字<sub>ヲ</sub>認<sub>得</sub>、仁愛親切<sub>ノ</sub>意味<sub>ヲ</sub>覚<sub>ス</sub>、乃仁説問答<sub>ヲ</sub>編<sub>リ</sub>」(五三丁裏～五四丁表)と、闇齋の意見がある。
- (14) 徂徠の『論語徴』にも「為」字は、孔子が加筆したとある。「孔子特に「為る」の字を加ふ、以て見る可き已」と。(小川環樹訳注『論語徴』2、平凡社、平成六年、一二六頁)
- (15) 土田健次郎氏は「仁とは、個人の内的欲求と社会的調和を両立させるもの」とする(『儒教入門』東京大学出版会、平成三年、一二六頁)。
- (16) 拙稿「大国神像考—出雲大社と垂加神道との関係から—」(『神道文化』一七、平成一七年)。